

series Salamander in the circle

# リ・コンストラクション

第二部

第十一章

*Hiro's summer* - 3

峯村 明



# リ・コンストラクション

登場人物

11・Hiro's summer-3

143.

144.

145.

146.

147.

148.

149.

150.

奥付

## 登場人物

桧山 健	21歳の大学生
間宮 ひろ	日本の高校生 陸上部所属
河合 ヤスオ	ひろの同級生 陸上部マネージャー
それ	魔物

143.

ひろたちのチームは4x100<sup>m</sup>リレーの予選を通過していたが、準決勝へ進んだチームの中では下位のレベルのタイムだった。

どの選手もこの日この時に焦点を合わせて調整してきている。調子がいい反面、疲労もピークなのだろう、と間宮宮司は結果を聞きながら思った。ひろは100<sup>m</sup>であれだけ好調だったのだから、リレーの決勝のために力をセーブする余裕があるのかもしれない、と。

競技中に故障をおこした選手が運ばれてくることがあるので、宮司は医務室のすみの長イスで遠慮がちに休んでいた。からだを起こしてみても目が回らないのを確かめてそろそろと立ち上がった。するとそこへ桧山が戻ってきた。宮司が起きているのを見て、大丈夫なのか、と尋ね、ミネラルウォーターを手渡す。

「もう平気だ。いや、すまなかったね、きみも予選見たかっただろうに」

「ええ、まあ」

9組中2組目という早い順番で走ってしまったのだった。

「とりあえず、準決勝以降は明日へ持ち越しということだな。きみ、今夜の宿は？」

町中の宿泊施設はすでに満杯状態のはずだ。

「ああ今夜のことはまだなにも。今朝ダラスから到着して、車借りてとんできたんです。百の決勝が見られるとは思ってなかったの、ラッキーでした」

宮司はちょっとげげんな顔をした。ダラス？ 昔、北米で大きな事件があった、あのダラス？

「オレは、いや僕は車中泊でも野宿でも、なんとでもなりますから」

「野宿ねえ！ いいねえ、若い人は！ じゃあ、ちょっと頼んでもいいだろうか、車で一時間ほどなんだが、知り合いのところに泊めてもらうことになってるのだ。そこまで乗せてもらいたいんだが。ついでにきみも泊めてもらえばいいよ。私の学生時代の後輩でね、私と同業、やはり神社なのだ。そういうとこでよければ……」

\*

車で移動中、宮司の携帯に電話がかかってきた。おや、母さんからだ、とつぶやきながら電話に出、相手の話に相槌をうってしばらく聞き役をやっていた。そして、

「うん、わかった、大丈夫だ。まあ、母さんはどんと構えてなさい、こっちが心配したって、始まらない」とそっけなく言って会話を打ち切った。う～む、と腕組みして車窓の真夏の田園風景を見てもなく見ている。

「……どうも……やられたな」

話がまったく見えないので、桧山はなんとも対応できずに黙っていると、

「ひろのやつ、リレーの予選の後、脚に痙攣をおこしたらしい。母さんの知り合いがひろの学校の選手団に同行しててな、電話で教えてくれたんだそうだ」

「……………」

「医務室にはこなかったから、大したことではないのだろうが……」

「宮司、やられた、というのは？」

「私のような職業にある者を胡散臭く思うかもしれないと以前、きみに話したことがあったが……」

「ええ、覚えてますよ」

「私にも、娘のひろにも、ふつうの人間には見えないものが見え、聞こえないものが聞こえる。ここしばらく、ひろには妙なものがつきまとっていたのだ」

「妙なもの……それは去年あったような？」

「西ノ宮奈々子さんのことかね、違うよ、全然違う。今度のはひどくイヤらしいやつだ。イヤらしいといっても色々あるが、人の弱みにつけ入り、気持ちの隙間に入り込んでくるイヤらしさだ。おそらくそうすることで、不安を煽り、ネガティブな感情を引き出すのだ。ほら、スポーツ選手がよく口にするだろう、フィールドの魔物とか、コート of 魔物とか。まさに魔物なのだ。心理攻撃が得意な魔物なのだ！」

「オレ、いや僕もローティーンの頃テニスやってて、大きな大会にはいくつも出たことがありますけど……そういう経験はちょっと、ないですね……」

「それはきみがそういう類のものを感知しないようにできているというだけのことだ。となりでせつせとささやかかれても聞く能力がないのだ」

「はあ……」

「大方の人間はそうなのだよ、聞く力がないか、聞こえてもなんとなく聞こえてしまうか。はっきり聞こえて会話まで成り立ってしまう方が珍しい。ひろはそいつから色々吹き込まれてな、調子を崩しかけていたんで、追い払って寄り付かないよう手を打っていたんだが……また舞い戻ってきたようだ。……思うに、そいつは肉体に働きかける力があるのではないかな……」

「脚の痙攣ですか」

「うむ、ひろの話によると、優秀なスタッフがそろっていて健康管理はがっちりされていたようだ、ならば痙攣などちょっと考えられん。それと、今度は私の変調だよ、なんだか胸に圧迫感がある。心臓の持病などもっとらんし、こんなのは、初めてだ」

楡山は思わず宮司を見た。

「私などの息の根をとめたところでなんの得にもならんだろうからな、ただのデモンストレーションだろう。こんなこともできるのだ、という」

「しかし！ なんだってそんなことを！」

「わからん。たかだか高校生の陸上選手をどうにかする、理由があるとは思えん」

「……………」

「明日のリレー、どんな手を使ってくるものか……私がそばについているわけにもいかん。あとはひろが自分でなんとかするしかない」

その夜、宮司は楡山のところへやってきて言った。

「ちょっとメールを打ちたいんだが、どうも手が震えるのだ。きみ、かわりにやってくれんか」

『スタンドでみている。おまえにならできる』

言われるまま携帯電話のキーを押して宮司に返すと、宮司はすぐに送信ボタンを押してしまった。そして「おやすみ」と行ってしまった。

それは、口元に微笑を浮かべていた。常に背後から感じていた波動が今は それ が立つ左前方からやってくる。

間違いない。これが それ だ。

それ の笑い声が連想させるように白金のフルートのような、金属質を感じさせる。かといって機械のようでもない。軽くあごをひきつけた端正な面は刻み込まれたように整い、上目遣いの注意深いまなざしは生き生きとした意志を映し出している。皮膚も長い髪も、全身が金色。

間宮宮司は魔物と呼んだが、そう呼ぶにはあまりにも……光輝いていた。真夏の陽射しのように眩しく、だがひどく冷たい輝き。一日前に間宮宮司の目を射たあの輝きだ。うかつに直視すれば目がくらんでしまう。

夜、現れなかったわけだわ、とひろは思った。そして、なにしに来たの？ と心の中で問いかける。

《見ているだけだ。気にするな》

言われるまでもなく、気にしているほどヒマではない。4x100リレー準決勝、第四組目、第一走者がすでにスタートしている。

《今日は全員、グッドコンディションだな》

第三走者、二年生の本木が難なくコーナーリングを決めてテイクオーバーゾーンに入ってくる。アンカー、間宮がスタート、練習どおりのバトンパス、ダッシュして一着でゴール。

陸上競技の教科書に載っているお手本のような展開だ。

昨日の予選ではレース中に三回行われるバトンパスを三回とももたつき、ゴール後に間宮が痙攣で転倒するというおまけまでついた。

陸上部顧問教師ほか、マネージャーたち関係者一同、それぞれ胸中でタベの不眠時間返せとつぶやいたのだった。

好タイムで決勝進出を決めてみんな大喜びだが、ひろは単純に喜べない。

《今日はなかなか良い出来だ》とそれに言われてもうれしくない。《昨日とは大違いではないか》  
心なしか、声が笑いを含んでいる気がするのだ。

昨日……？ 昨日の予選も見てたの？

《当然だ。昨日もスタンドから観戦させてもらった。私はいつもおまえのことが心配だ。だからいつも見守っている。彼、桧山 健のようにな》

ひろはぎょっとして思わず汗をふくタオルを握りしめた。

《おや、知らなかったのか？ 桧山 健が観戦に来ていることを》

桧山さんは……来ないわ

《ほう？ 私が嘘をついている、といたいようだが？》

そうじゃないわよ。彼はこの大会が終わるまでは、連絡しないし、会わない、って言った。だから私もずっと電話しなかったし、会う気もないわ

《何ヶ月も、話し合うことなしに、信じあえるというわけか？ 目の前の私の言葉が信じられなくても？》

……………

その金属のような金色のような顔は刻々と表情を変える。まるでコンピューターグラフィクスを眺めているような非現実感がある。冷淡さを装っているが、その仮面の下になにか毒々しい情念が渦を巻いているような気配を感じるのだ。

145.

《おまえはなぜ走るのだ？》

……私自身が走りたいから。それだけよ

《良い答えだ。おまえの高校の新聞部が泣いて喜びそうだ。インターハイ特集の見出しはそれに決まりだな》

……なにが言いたいなのよ？

《皆がおまえに注目している。おまえの一挙手一投足が皆に影響する。リレーチームにもマネージャーたちにも。おまえが決勝で失敗すれば皆がっかりだ、今まで培ってきたことが台無しになる。あるいは間違っていた、ということになるからな。それでもおまえは、結果は関係ない、おまえ自身が走りたいからだ、というのか？》

……………

《おまえが走って勝利することによって実に多くの人間たちの夢と希望がかなえられる。そうすれば彼らは口をそろえていうだろう、彼女は素晴らしい、と。間宮 ひろよ、おまえが走る本当の理由を教えてやろう。それは人々の夢と希望をかなえるためではない。おまえ自身が賞賛と栄誉を得るためだ》

ちがうわ！

《ちがうものか、私自身のために、と自分で言ったではないか！ 間宮ひろ、おまえは桧山 健の何を知っている？》

……よくは……知らない

《おまえは彼から求婚されている。それを受けようとしている。そうだろうか？》

……………

《ふふふふふ……ふふ……彼は金持ちだからな》

……………

《おまえのような世間知らずの小娘にもあの男の財力はわかるとみえる。

……そうとも、あの男はおまえに、富が現実を動かす様を見せるために、それがもたらす快樂を教えるために現れたのだ。このインターハイ全国大会でおまえが勝利することをあの男は望んでいる。あの男はおまえの欲と望みをすべてかなえる者だ。なんと都合のいいことだ——！ おま

えはこの大会を勝ち抜けば名誉を、富を、恋人をも、獲得することになる！ 今日のおまえのコンディションならばたやすいことだ！ ——そんなことはさせるものか！！》

ちょっと～！ なんてそうなるのよ……勝手にそんなこと、決めつけないでよ——！！

《私にはこのゲームの展開が読める。どの高校がどの種目で、どんな成績で優勝するか、すべて読めてしまう》

それはこつこつと硬い靴裏で硬い床を歩き回る音をさせてひろについて来る。つま先の尖った、ピンヒールを思わせる。高く張り出した胸、細くくびれた腰、惚れ惚れするようなしなやかな曲線は女性以外のものではない。

言い分は筋が通っているように聞こえるが、感情的な色合いに染まった理不尽さが根底にある。女のような思考回路、まったく女性的なイヤらしさだった。

《私はこのゲームを操作できる。おまえのひとり勝ちなどという許せない結末は、変えてやる》

だからなんでそうなるのよ！？ 私があなたに何をしたっていうの！？

相手は、はた、と黙った。意外なことを聞かされたともいうふうに。

《何をした、と？ 何をしたのかと、私に聞くか》 異様に、静かな声音。

《私は愛する人を、奪われた。誰に？ おまえにだ！！》

《なんでも何もあるものか！ 私はおまえが嫌い！ おまえが私になにをしたか、だと！？ おまえは私の愛する人を奪ったのだ！！》

ひろは呆然と、絶句した。この人はいったい何をいっているの——

《ふ……ん、おまえはいつもそうやって、被害者づらをし、いい子ぶる。そうやって周囲の同情を買おうとする。なにからなにまで……気に入らない！！》

《なお気に入らないことに、おまえは私の言うことを信じようとしな。私が得ている情報はすべて本当だというのに》

.....

《今度はだんまりか。ふふふふふ..... 檜山の見ている前で、どうやっておまえに恥をかかせてやろうか？》

それ はほとんどどうきうきした様子であたりを見回している。

《たとえば——こんなのはどうだ？》

女子生徒がひとりフィールドを横切ろうとしていた。ユニフォームではなく、どこかの学校の制服を着ている。それ が女子生徒を一瞥すると、彼女の足がもつれた。バインダーかなにかを胸にかかえていたのでとっさに手がでない。女子生徒はそのまま顔面から地面に転んだ。

女子4x100リレー決勝を待つて、期待と緊張でざわついていたスタンドが一瞬静まり返り、あちこちから失笑がもれた。転んだ女子生徒はばら撒いてしまった書類を必死でかき集めながら恥ずかしさのあまり真っ赤になって泣かんばかりだ。

フィールド上の選手たちは、縁起でもない、と顔をしかめる。

——なんてことすんのよ！！

それ は、ははははっ、と楽しそうに笑った。

《それから、こんなのはいかがかな？》

同じく決勝に出場する、他校の選手が急に青くなって前かがみになっている。額にみるみる脂汗が浮かんでくる。それ の手が内臓を握り締めているのだ。

やめて！ やめなさいよ！！

それ の笑いはますます高く、朗らかになる。

《そうだ、おまえには素敵なプレゼントをあげよう。私の心は広く、気前がいいのだ！》

ひろは思わず両手で耳を塞いだ。間近で号砲が鳴った。一発、二発.....次々と、数え切れない号砲が轟き、花火のように炸裂し、耳がどうにかなりそうだ。

《薄っぺらい偽善と薄汚い欲のうえにすべてを手に入れようとする、おまえはなんて高慢で！ 下劣な娘だ！ なにからなにまで気に入らない！ おまえの良い子ちゃんづらが恥辱と苦痛に歪むところが見たい！》

その哄笑と言葉は高熱の毒針のようにひろに降り注いだ。ひろは無防備にその針を全身に浴びた。

\*

「おい！」

誰かがそっと声をかけ、肩をつかんだ。足ががくがくと震えている。

「……河合くん……？」

河合はほっとしたように笑顔を見せた。彼の屈託のない笑顔はなににもまして浮き上がる気持ちを現実に引き戻してくれる。

「珍しいなあ！ おめえが緊張してるなんてさ！」

河合が目で問いかけてくる。(大丈夫か……？)

彼はひろがまた変調に襲われているのに気がついているのだ。ほんとうは言いたいことが山ほどあるのだろう。

「出番だぜ。何も考えるな。走ることに集中しろ。おめえの不安はおれが全部引き受けるから！」

147.

「ねえ、みんな……」ひろは共にバトンをリレーするチームメイトたちを呼び止めた。「みんなは……何のために走るの？」

「はあ？」と第二を走る梅田が頓狂な声をあげる。彼女は女子部の主将だ。「ちょっと間宮、あんたこの期に及んでなにいてんの？」

「あ、あたしはねえ、これしか能がないから。ウチの親なんかあたしがインターハイ出れるってだけで舞い上がってるよ、これで親戚中に自慢できるって。あたしだって、ほめられれば嬉しいし、欲しいもの買ってもらえるしさー」

「あー。佐原先輩、それってありますよねー、」

「でしょー？ そういう本木ちゃんは？」

「私にあこがれのひろ先輩といっしょにいられるからです」

ひとりだけ二年生の本木は、ブラスバンドの木下、女子高飛びの佐々木と、さらにひろを含めて四角関係を演じている。

「なに能天気なこと言ってんだよ、あんたたちは！ 全国大会の決勝まできて情けないよ！ 優勝しちゃったときにどっからインタビューがきてもいいように、もっと気のきいたこと考えときなよ！！」

「じゃあ、梅田主将はさぞかし、気のきいたこと考えてんだらうね？」

「あっはっはっはっ！ 佐原、あんた、なんか考えて走れる？」

「ムリ」

「私もあこがれのひろ先輩といっしょにいられるだけで胸がいっぱいです」

「だろ？ だからさあ、間宮、誰もなんにも考えてないよ。何のために、なんて、走ったあとで考えりゃいいじゃんか！ まあ、河合が言ってたけど、あんたは走るために生まれてきたような体してるってさ」

「うわー、なんか河合には言われたくないな」

「そ、そうですね」

「同感同感。だからさあ、間宮」

「うん……」

「素質とか、才能とか、自分もってるもの全部燃やして燃やしつくしたい、って熱くなるの、当然じゃないか？ よし、あたしがここで一発決めてやろう、あたしたちはこの燃える情熱のために走るのさ！」

「おお……！ よくわかんないけど、さすがだよ、梅田！ だてに主将やってないよ！！」

「梅田先輩！ あとで今のメモらせてください！」

「あーも一二度と言えないよ！」

じゃ、もうひとふん張りしようか、と気楽にいつて、梅田主将は話を終わらせ、それは無表情に彼女たちの背後にいた。そして彼女たちにこっそりと耳打ちした。

《梅田主将はいいことを言った。この期に及んで、なにを考えても無意味だ。おまえたちのやってきたことはすべてムダに終わるのだ》

哄笑

「ねえ、みんな……」とひろはもう一度言った。

「みんながいたから私ここまで来れた。私たちを支えてくれた人たち……マネージャーたちや部のみんな、部の伝統、先生たち、応援してくれる人たち、数え切れない人たちのおかげよ。私たちみんな、誰も間違っていないって、そう証明したい。だから私は走るわ」

《生意気な小娘。なにもかも気に入らない！》

憎々しげに顔をゆがめて、それは吐き捨てるように言った。

あなたがなんでそこまであたしを嫌うのかわからないわ。話があるならつき合うわよ。ただし決勝が終わったあとでね。それでいいかしら？

もう、それを相手にしている時ではない。第一走者・佐原がスタートした。佐原の鋭いスタートダッシュはひろもかなわない。

《ふざけるな小娘。対等のつもりか？》

それには話し合う気など、まるでなかった。したいだけ攻撃し、相手には反撃させない。あの時と同じだった。

瞬く間に梅田にバトンが渡る。彼女は面倒見がよくて人望が厚い。安心して見ていられるし、見ていてくれる人だ。

それは少々焦った。四人まんべんなくダメージをあたえてやるつもりだったが、出遅れた。気に入らない極みの間宮 ひろを、かさにかかってこれでもかと追い詰めておいた。小娘は意気消沈して這いつくばるはずだった。まさか反撃してくるなど、考えもしなかったのだ。

本木はひろに憧れて高校から陸上を始めた。一年ちょっとでここまで来たんだから、才能はあるのよ、とひろは繰り返し言い聞かせてきた。彼女はマスクも性格もちょうど甘くて、勝負どころに弱いのがひろは先輩として気になっていた。

決勝出場8チーム中、一番手で三人目がバトンを手にする。口の中でカウントしながらいつものタイミングとテンポでひろが走り出す。

「！？」

本木が追いついて来ない。ちらりとふりむいたひろと、本木のまん丸に見開いた目が合った。

もっちゃん！？

脚がへん！ と本木の目が叫んでいる。

痙攣！？ もっちゃんが！？

バトンパスは渡す方、受け取る方、どちらも全速で走りながらのわざ、それはどのチームも同じだ。ここで減速することは敗退を意味する。

しかしひろは減速を強いられる。パス可能域を超えれば失格になってしまう。

本木のバトンを待っていたのはほんの一、二秒だったのだが、永遠に等しい時間だった。

脇を走り抜けていく他校のランナーをひろは目の端で数えた。数字が頭に入らない。

それは快哉の哄笑をふりまき、コース上に立ちはだかっている。負けを認めよというのだ。

「先輩！！ ごめん！！」

バトンが渡ったとたん、本木が激痛と悔いの悲鳴をあげた。倒れながら泣き叫んでいる。「ひろ先輩！！ ごめん！！」

冗談じゃない！

ひろは叫んだ。

まだ負けちゃいないわよ！！

それの端正な顔が恐怖にゆがんだ。

私はみんなの想いを背負ってるんだから！！

減速した状態から佐原のスタートダッシュをイメージする。——こんな感じだわ！

コース上にいたその体を突き破ったような気がする。金色の光が破裂するように飛び散った。

ゴール直前で先行する二選手を抜いた。順位をコールされたがまるで気にならなかった。

ゴールを駆け抜けた足で泣きじゃくっている本木のところへ戻る。——梅田主将はいつも自分のレースより部員のそれを心配してたっけ。

「もっちゃん！！」

「先輩、ごめん……勝てるレースだったのに……私のせいで……」

「立てる？ もっちゃん。行こう、表彰式。三位だよ、私たち」

「三位？ ——だって！ 何人も……三人も四人も抜いてったのに——？」

「私が抜き返したわよ！ さ、立って！」

「先輩、あのね、あたしたちみんなで話してたの、先輩をベストな試合結果で送り出してやろう、って。だって先輩はぜったいオリンピックや世界陸上で活躍できる人だもん。それなのに……私……！」

「……ありがと、もっちゃん。でも私が走るのは明日の二百が最後よ」

\*

「宮司、僕はこれで……」

「二百は見ないのかね？」

「ええ、もう充分です」

「そうか。せめて会ってから行ったら……？」

「大会終わるまでは会わないことにしましたから彼女、僕が来てること知りません」

「……そうかね……では、またいずれ」

「ええ。近いうちに」

\*

翌日、女子二百種決勝でひろはまた自己ベスト、大会記録をそれぞれ更新して勝者となった。こうしてひろのインターハイは終わった。

好成績を収めたひろたちの陸上部はしばらく時の人扱いされた。しかし夏場は大きなスポーツイベントが次々と催される時期で、人々の関心は新しい方へと移っていく。内外の祝勝会やらなにやらをこなして、彼女たちの身边が静けさを取り戻したのはインターハイが閉幕して二週間あまりが経ったころだった。

夏休みの残りを実家ですごそうと、荷物をまとめて宅配便で送り出して部屋に戻ってくる。勉強机の上に置きっぱなしにしていた携帯電話にメールの着信があった。

河合くんかな、第三次祝勝会の話かな、となにげなく開けてみると、桧山から、空港からだった。二時間あまりでそっちへ着く、という内容だった。

\*

「すみません、専務。いきなり来てしまって」

「あら、うちはべつにいいのよ。だけどいいタイミングだったわね、ひろちゃん、昨日までじっとしてなかったのよ」

なおみ専務はひろの浴衣の帯を直しながら言った。

「そうなの！ ずっとばたばたしてたの！ 明日うちへ帰るつもりだったし」

「明日……？」

「さ、できた。いいわよ、行ってらっしゃい」

湖岸通りには観光客向けにこぎれいな店がたくさんあるが、インターハイ出場でちょっとした有名人になってしまったひろは人目につく時間帯、人目のある場所への外出は控えめにしていた。なおみのすすめで夕食は新城家でごちそうになり、暗くなってから湖岸公園の散歩に出たのだった。

なおみを交えていた時はふつうに世間話を交わせたのだが、ふたりきりになると何を話していいやら、緊張が先にたってしまう。新城マンションから湖岸公園まで車で五分ほどの時間をふたりはだまって移動した。

コットンのシャツとパンツの格好の桧山はそのへんにいる学生とそうかわらない。が、インターハイの地方大会や全国大会でレベルの高いアスリートたちをみてきたひろは、彼はやっぱり何かちがう、と思う。見ているとときどきと胸が高鳴ってくる。

「おめえの走りを見てると胸の中がかきたてられる」と河合が言っていたが、それってこんな感じなのかしらと思う。言葉にしてみれば、このひとになにもかも捧げつくしたい、そんな気持ちにさせられるのだ。

「話したいことがたくさんあるんだ」と彼はいった。風が涼しい夜気と水の匂いを運んでくる。「なにから話していいのかわからないくらいたくさん……でもおまえに会ったら真っ先に聞かなくちゃならないと思っていた。ひろ」

呼ばれて顔をあげると彼の黒い瞳が見ていた。

「オレの気持ちは変わらない」

「……私も」

彼は一度目を閉じて、ひろを見つめなおした。「オレはおまえから陸上をとりあげようとしている。それでもいいのか？」

「私は全部燃やし尽くしたの。悔いもなんにも残ってない」

「オレと……結婚してください」

「……はい」

## 149.

間宮宮司はすました顔でふたりを出迎えた。

さっきまで娘のインターハイ関連記事スクラップをにやにやしながらめくってたくせに、と間宮夫人は内心あきれている。

この夏、訪問客があるたびにスクラップ・ブックをみせびらかし、自慢話に余念がなかった宮司だ。しかし、お嬢さん、将来が楽しみですねえという話に発展するとわかってからは、スクラップ・ブックと自慢話はすっかりなりを潜めていたのだった。

\*

時候の挨拶から始まって本題にはいろいろかという前に、宮司は一応、礼を述べた。「その節はどうも」と。

「いえ……その後、いかがですか」

「うむ……あれつきりさ」

「そうでしたか、大事なくてなによりです」

ひろは父と求婚者を見比べたがなんのことかわからなくて、口をはさまなかった。

「ところで……」と父が話を切り替えてしまった。

「娘から話を聞いてから、失礼して少しばかり調べさせてもらいましたよ、きみの生い立ちと、オーストラリアに在住する理由なんかをね。まあその……たいへんな資産家でおられる。この資産からの収入がまたたいへんなものだ」

(へえ、あの人もそんなこと言ってたわ、桧山さんがお金持ちだというようなことを。……本当だったのね)

「ありていに申し上げるが」

宮司はちょっと息をついた。

「——ありていに申し上げるが、ちょっと、びびってしまってね。なんというか、あまりにもスケールが——この国と違いすぎる。いったうちの娘に、きみの配偶者がつとまるのか、単純にそういう疑問がわいてくる」

「……僕のことをどちらでお調べに？」

「うむ、きみの養父をされていた桧山 善人氏と話したのだ。それでウィリアムスさんを紹介された。この人物なら、正確かつきみの不利にならない情報をくれるだろうと、そう言っておられた」

ウィリアムスですか、と桧山はなんとなく渋い表情で言った。「彼は僕の顧問弁護士ですから」

「そのウィリアムスさんの話の中で、H&L財団、というのが出てきたんだが……」

桧山は顔をあげて間宮宮司を凝視した。見開いた目で、無表情に。

「H&L財団……ファウンデーション ヒヤマ&ラウレンス。ブリュッセルに本部がある……」

「宮司！」と桧山は話をさえぎった。テーブルに身を乗り出している。「ウィリアムスがその話を！？」

「う……ん。ウィリアムスさんから聞いた」

「……そうですか」楡山は乗り出していた身をそろそろともどした。「どの程度、聞かれたんですか？」

「いや、五十年ほど前に楡山氏とラウレンス氏とが立ち上げたものだ、としか」宮司はちょっと困った顔で言った。

「ヒヤマという名がついてるからにはきみにきけばわかると思ったものでねえ、詳しくは聞かなかったのだ」

「実は——僕も詳しく知らないんです」

150.

「オレ、いや僕は成人した際に、両親が遺した財産をすべて、遺言状の内容どおりのものすべてを引き継ぎました。しかし、遺言状に書かれていないものがあつたんです。それがヒヤマの名のついたH&L財団ですが……財産というよりは、オレの、いや僕の、おそらく生涯の仕事、ライフワークになるはずのものです……」

「どうぞお楽にして……」と、間宮夫人が上着を脱ぐよう勧めた。間宮家はサマーウールの上着を脱ぐ必要を感じないほど風の通りがよかったが、それでも勧められるままYシャツだけになるとかなり気持ちが楽になった。

「どこからお話しすればいいのか……そう……オレが、いや僕が財団の存在を知ったのはほんとに偶然だったのです……」

\*

大学の仲間うちで、ちょっとかわった奨学金が話題になったことがあつた。聞いてみると、審査基準がおそろしくシビアで、ノーベル賞選出並みの選考がおこなわれるというのだ。だが合格すればやはりノーベル賞並みの手厚い支援が受けられる。——それは初めて耳にする奨学金の名称だったが、他薦自薦は関係ないというのでオレも応募してみようかという気になった。あわよくば、程度の好奇心からで、面白半分ではあつた。

そこで調べてみたところ、奨学金の出資者はH&Lという団体、創設者は桧山 正悟とアルベルト・フォン・ラウレンス、それぞれの頭文字をとったものだった。

現在、ラウレンス氏は健在だが、桧山についてはセオデリック・ウィリアムス氏が代行しているところがある。

なんのことはない、正悟はオレの祖父で、セオデリック・ウィリアムスはオレの弁護士だ——！

すぐにウィリアムスのところへ行って、これはなんだ、どうしてオレが知らないんだと問い詰めた。じっさいオレはこんな奨学金がこの世にあるとは知らなかったのだ。そうしたら——！！

「そうしたら？」そう尋ねたのは間宮宮司だったのかひろだったのか。

ウィリアムスはこう言った。『きみには十年早い。だから教えなかった』

どういうことだ、それは！？ 奨学金を受けるのが、か、財団の運営に参加するのが、か。どっちなんだとオレは食い下がった。

ウィリアムスのやつ、両方だ、と言いやがった！！

そこまで言ってしまってから、桧山はしまった！ という顔をした。思い返すのに夢中になって、ひろの両親を前にしていることを失念していた。

「——失礼。あんなに悔しいと思ったこともなかったもんですから！」

いただきます、とことわって桧山は緑茶でひと息ついた。

\*

ウィリアムスの名が出たときに抵抗感のようなものをちらつかせたのはそのせいだったのか、と宮司もお茶に手をのばした。

「H&Lという団体の、設立趣旨のようなものは？」と尋ねると答えがすぐにかえってきた。それはなにか横文字で、思わず宮司は聞き返し、桧山は同じ横文字の文言を繰り返した。

「ラテン語です。直訳すると、『おのれの魂に忠実に生きる者たちのために』となります」

「おのれの魂に忠実に生きる者たちのために——？」

「そのために財団は支援を惜しまないという意味と、そのために己の才能を磨くことを惜しむなという意味と、二重の意味があります。経済力にせよ、才能にせよ、自分のためではなく他のために使えと、それが財団の根幹理念であり、その実現のために財団が設立されました。H&L財団とは、人材育成を目的とした団体なのです」

11・「Hiro's summer-3」

12・「Foundation」へ続く



奥付

リ・コンストラクション

第十一章 Hiro's summer-3

2025年 4月10日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[写真AC](#)  
[Designer](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社